

ワクチン雑感

日本政府は新型コロナ用のワクチンがなかなか手に入らず苦労しているようだ。大変困ったことではあるのだが、良い教訓でもある。日本で作らなくても金で買えるものなら他所から買えばよいという考え方の底の浅さが露呈したわけだ（金をだせばすぐに手に入るというわけではないものがあるということがわかったことが今回の教訓として重要なわけであるが、いずれ他所から買おうにも買う金がなくなるかもしれないということも当然懸念すべきである）。このような考え方は別に政界や財界だけのものではなかったのではないか。やや飛躍するかもしれないが、20世紀末の認識論的配置転換の失敗にもかかわる問題のような気がする。

20世紀末から21世紀にかけて世界は工業化社会から情報化社会に移行した。特に日本では近代的な製造業の役割が非常に低く評価されるようになってしまったようだ。80年代後半のプラザ合意＝円高による産業の空洞化を埋めようという努力は十分にはなされなかったのではないか。他方、何故か伝統的なモノづくりは評価され続けた。肝心の情報化には遅れを取った。情報化に関わる製造業＝半導体生産もアメリカの圧力を受けて放棄されたままになった。

その背景に80年代～90年代の新思潮が関わっているような気がしてならない。消費社会論や記号論とともに過大に評価された商業資本主義である。確かにアマゾンや商業資本主義の頂点かもしれないが、それを可能にしたのは情報化であって、商業資本主義本来の潜在力ではないのではないか。

交換関係の再評価は、生産力偏重のマルクス主義の見直しにとって大きな意味を持ったのかもしれないが、新しい世界の動きを正しく認識する道を閉ざしたのではないか。情報化（及びその他の科学技術的イノベーション）を軸に生産と流通をドラスチックに再編成することにこそ活路があったのではないか。それなのに「伝統」を引きずり素朴な金儲け（現代的な高度な金融は実はこの線と親和的なものかもしれないが）による自己実現（起業）を（公共性を見捨てながら）有難がり、結局観光業に一縷の頼みを繋ぐような変な話になってしまったのではないか（商売や起業や観光業がいけないと言いたいわけではもちろんない）。そしてその偏向をきちんと指摘する知性は存在しなかったのではないか。

1990年代の学問や思潮を（ポストコロニアリズム方面も含めて）根本的に反省することはとても大事なことはないか。